

4月27日みどりの式典にて、天皇后陛下ご臨席のもと、内閣総理大臣より、みどりの学術賞を拝受しました。内閣府のホームページによると、「みどりの学術賞」は、国内において植物、森林、緑地、造園、自然保護等に係る研究、技術の開発その他「みどり」に関する学術上の顕著な功績のあった個人に内閣総理大臣が授与するものです。」とあります。とても、この説明に値するような業績を私があげているとは思っておりませんが、これまでの教育・研究、社会活動を評価して頂けたことは、身に余る光栄と思っております。

緑のエッセー



北海道大学大学院農学研究院教授。
平成17年、日本森林学会受賞。
平成21年、生態学琵琶湖賞受賞。
平成23年、尾瀬賞受賞。
平成24年、第6回みどりの学術賞受賞。
森林、河川、湿地、湖沼など、流域の環境保全に関する研究によって、荒廃した水辺環境の修復に貢献し、国際的に高い評価を得ている。

選考委員会による私の功績概要には「生態系管理学の分野において、森林、河川、湿地等のさまざまな生態系で構成される流域に焦点を当てて研究を行い、洪水や山崩れなどの地表変動攪乱は、生態系の維持機構として重要な役割を果たしていることを明らかにするとともに、流域内の生態系の相互作用を解明した。これをもとに、生物種と生態環境を基準にした生態系評価と復元の方法を確立し、これが日本の森林、河川、湿地の管理指針として定着するなど、斯学の発展に貢献した。」とあります。これまた過大な評価ではあるのですが、個別生態

系に集中して研究するよりも、森林と河川の相互作用系など、生態系のつながりに注目して研究してきた私にとっては、大変ありがたい評価でした。かつての理水砂防学や森林計画学を発展させ、新たな時代の要請にこたえるべく、「生態系管理学」が必要であると、今から15年くらい前に思っていました。同時に、日本が戦後の「オーバーユース」時代から「アンダーユース」時代に突入したと感じていました。日本の総人口は、将来、急激に減少し、2050年には1億人を割ります。北海道東地域の人口は、2035年までに4割程度減少し、将来は消滅集落となるでしょう。

戦争や国土開発によって山地が荒廃し、禿山や河床上昇に伴う土砂・洪水災害が頻発した戦後とくらべて、国土が緑で覆われ人口増加が止まった現状では、森林・林業分野が担う役割は異なってくるはずですが、また、将来の人口減少と高齢化は、経済活動や公共事業投資にも大きな影響を与えるでしょう。こうした未来像と、近年の河床低下、河川の樹林化を考えれば、「水系の観点から防災施設を配備して土砂生産を抑えたり、崩壊地を緑

化する必要性は薄れてきています。今後は、崩壊地を土砂の供給資源(リソース)として捉え直す必要があると思います。

一方で、日本の外材依存がいつまでも可能であるとは思えません。近年、中国木材需要の急増、ロシア原木輸出の制限などで、日本の木材価格も上昇し、人工林の面積増が実施され、社会問題になりました。リーマンショックにより一旦は下火となりましたが、新興国の経済発展は著しく、国際市場における木材資源の枯渇および価格の高騰は、避けられないと思われます。戦後と同じ轍

を踏まないためにも、どの森林資源をいかに収穫し、どの資源を残すのか慎重な対応が必要であると思います。

人間の撤退に伴う竹林・放棄人工林の拡大、野生動物との軋轢も気になります。今後は、野生動物管理を含めた生物多様性の保全と森林生態系の機能発揮(生態系サービス)をトータルに管理できる技術が必要とされるでしょう。「みどりの学術賞」を受賞した今、こうした社会・自然レジームの変化を見据えて、研究に取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。